本棚

高橋信正　編著

『「農」の付加価値を高める六次産業化の実践』

2010年12月に公布された六次産業化・地産地消法に基づく総合化事業計画の認定件数は，13年11月末時点で1,690件に達し，六次産業化は所得拡大を図る農業者だけでなく，地域活性化を期待する地域や自治体等においても大きな関心が持たれている。また，日本政策金融公庫の平成24年度「農業の６次産業化等に関する調査」によると，六次産業化に取り組んでいる平均年数は8.3年で08年の農商工等連携促進法施行以降に取り組んだところが多いが，90年以前から産地直送などの六次産業化に取り組んでいるところも多い。全体としてはまだ取組みから日の浅い六次産業化が，政府の期待するように農業の成長産業化，地域社会の活性化につながっていくために，六次産業化に成功した先達者・先進地の事例は多くの貴重なヒントを与えてくれるであろう。

六次産業化の先進事例集は農林水産省のHPにも掲載されているが，本書の特色としては，かなり地域差の大きい六次産業化の取組みについて，北は関東から北陸・近畿・中国・四国，南は九州まで，各地域で活躍する農業および六次産業化に関する研究者25名が執筆を担当し，以下の５項目を執筆ポイントとしている点である。

①他の事例集にない執筆者なりの新しい視点を出す，②事例の形態は立地する各地域の特徴に制約されることがあるのでその関連性を出す，③各作目からのアプローチを出す，④単なる事例紹介だけでなくそのモデル化のノウハウも入れる，⑤必要に応じ農業外の業者に連携を訴えるようなノウハウを書く。

そして，本書の７つのパート，25章で構成され，パートⅠが六次産業化の入門編，パートⅡ～Ⅶが実践編で，パートⅠ「六次産業化の分類・施策・支援・ファンド」，パートⅡ「一品目で多角化をめざす」，パートⅢ「地域コミュニティの大切さは変わらない」，パートⅣ「流通チャネルを活かす組織は伸びる」，パートⅤ「地産地消、直売所、棚田、女性起業で交流を深める」，パートⅥ「農業協同組合の六次産業化への挑戦は」，パートⅦ「六次産業化が向かう姿」となっている。

実践編は，品目別の多角化の方法，地域農業全体での六次産業化の方法，多様な流通チャネルの活用方法，推進のキーワード，農協の関わり方など六次産業化のタイプ，取組みの視点別にわかりやすく解説され，各執筆者の農業および農村の六次産業化の実現への深い思いが伝わる内容となっている。

なお，編者が本書の趣旨は，「下請けの農業からの脱却を提唱し，日本の農業に元気をあたえ，これまで他の産業の主体者に帰属していた付加価値を彼らから奪取することを高らかに謳う本だ」という点にはいささか違和感がある。餅は餅屋，農業者は生産に専念すべきという意見もあるなかで，上記の日本政策金融公庫の調査で，六次産業化を進める上で不足しているのは「営業・販路確保」の人材・ノウハウが１位であることからも，六次産業化の本質は，農業者と加工・流通業者が敵対するのではなく，相互の価値を理解しWIN－WINの関係になり，地域内なり国内での持続可能なフードサプライチェーンを構築することであろう。

――筑波書房　2013年12月

定価2,625円（税込）　271頁――

（編集情報室長　堀内芳彦・ほりうち よしひこ**）**

農林中金総合研究所
http://www.nochuri.co.jp/